

ご存じの方が多いと思うが中国山西省に、五台山という中国仏教聖地がある。普陀山、峨眉山、九華山と並ぶ中国四大仏教名山の一つで、ここは文殊菩薩が降臨し教をを広めたところとされて居り、日本からも古今の僧たちが多数訪れている。かつては300以上の寺が林立していたこともあるそうだが、今は、台内・台外併せて合計47ヶ所とのことだ。それでも高みから眺めおろすと、あれも寺、これも寺、あっちもこっちも寺だ。

いつだったか中国旅行の帰り、機内の乗客サービスの雑誌「中国民航」に、「中国仏教聖地・五台山」という紹介記事があった。台懷鎮という寺の街を3000m前後の台状の五つの峰が取り囲む仏教聖地で、著名な寺々の華麗な写真説明の外、この五つの峰は、季節の花々が彩りハイキングもできると書かれてあった。当時、山歩きに夢中だった私はいつか歩いてみたいと心に決めた。

その後、「わんりい」会員の岩田温子さんの紹介で、山西省中国国際旅行社の黄玉雄さん(現在副社長)が、山西省の観光スポットを毎号紹介くださるようになった。それを機に、岩田さんを通して五台山ハイキングを織り込んだ「五台山の旅」を計画して貰った。かくて「わんりい」の女5人が、2002年の夏(少々旧聞だが)、五台山を囲む五つの峰すべてを巡る機会が訪れた。

今年(2012年)1月、「わんりい」の中国語勉強会講師の郁老師が五台山を紹介する短文を読まれ、俄かに懐かしくなって古いアルバムを引っ張り出して眺めたりした。

今年もそろそろ、五台山を訪れる絶好の季節である。五台山ハイキングに行ってみようと思われる人が現れて、その後の様子などの報告を聞かせて貰えたら嬉しい。

▲南台(2485m)

五台山はまさに中国仏教の聖地だ。「佛教聖地五臺山」と書かれた台懷鎮入口のゲートをくぐってしばらく走ると極彩色に彩られた立派な寺が窓の外に現れては去ってゆく。五台山は中国で唯一の中国仏教聖地とチベット仏教(ラマ教)聖地が重なったところだそうで、街を貫く川に沿った道路を、五体投地で祈りを捧げながら進んでいる



南台からの眺望 手前は全面自然の花畑だ



南台山頂の寺・普濟寺 五台山の、それぞれの峰の頂上に寺があり、異なる文殊菩薩が祀られているそうで、南台は智慧の文殊菩薩と紹介されている。

チベット人巡礼の人達がいた。

五台山に着いた翌日、東・西・南・北に中台を加えた5峰の中で訪れる人が最も多いという南台に行った。頂上近くまで車で入れるが、歩くのが目的だからと車は山の中腹で下りた。車を降りると一面の色とりどりの夏草・秋草の豪華な歓迎である。タカネナデシコ、マツムシソウ、シオガマ、リンドウ、ノコギリソウ、ウスユキソウ、アザミ、ワレモコウ等々数え上げたらきりが無い。

車路から離れて緩やかな草原の中を思い思いに自由気ままに歩く。山西省の東北部のイメージは黄土に覆われた裸の山々が連なる黄土高原だが、目の前にはどこまでも緩やかな緑の峰々が連なり、夏の間は放牧地となっているとのことだ。草地なのにキノコも採れるらしく、観光客を当て込んで家族でキノコを売っていたりしていた。

五台山の各々の峰の頂には寺が建てられており、中国全土からの観光客が巡礼を兼ねて峰々を訪ねるそうだが、

中でも南台は、標高も低く、舗装はされていないが緩やかな山の腹を上るちゃんとした道路が頂上まで続き気楽に入りやすい。5峰を巡った後の感想では、花も花の種類も南台が一番多い。観光客が多いのもむべなるかなだ。

この日は、第一日目とあって季節の花々に嘆声を上げながらのハイキングだったが、頂上直下で突然雨が降り始めた。堂内の休憩所でお湯を貰い、黄さんが用意くださっていたカップラーメンで食事を済ませ下山を余儀なくされた。が、五台山ハイキングの旅最終日に車で再訪した。五台山ハイキングはどの峰も状況と脚力に合わせて車を使えるのがいい。再訪の時は快晴で、寺の前に沢山の屋台が出ていて薬草や仏具、アクセサリなど売られていた。

▲西台(2773m)・中台(2894m)・北台(3058m)

翌日、今度は中台泊の予定で、西・中・北の1泊2日の行程で出発。黄さんがチャーターした車で途中まで行った。中台で用事を済ませ西台で合流するという黄さんと別れて、女5人、おおざっぱなコースの説明を受けて元気いっぱい西台に向かう。車も通れる緩やかな道を横切りながら登ってゆくので心配はないのだが、とはいえ、広大な中国の空の下だ。目指す頂上も見えない茫漠とした風景の中、私たち以外誰もいない。ふっと孤児みなしごになったような心もとなさを感じる。

突然、雷が大音響で鳴って俄雨が降ってきた。快晴と言えないまでも、ちょっと前まで穏やかに薄日も漏れていたというのにである。雨は、この時は幸いなことにさしたる降りにはならなかったが、山の腹を上り詰め、霧の中はるかに霞んで西台の寺が見え、一足先に西台に到着し迎えに出ていた黄さんの姿を確認できたときは本当に嬉しかった！黄さんも思いも寄らない雷にかなり心配したようで、再会をお互いに喜び合った。前日の南台といい、この日といい3000m近い山の天気は変わりやすい。

時間は午後1時頃になっていて、昼食は西台の寺で、お坊さんたちが昼に食べたというお皿ほどの大きさの葱餅ツォンビンを温めなおしてくれた。

しばらく休憩して出発する。雨も上がってまあまあの天気になったかと思ったが、歩き出して間もなく再び崩れ、中台への道は小雨の中になった。高度も3000mに近くなり



西台で寺の昼食を頂く

足元は石がごろごろ転がるだけの悪路に変わった。雨はだんだん強くなり、午後4時をかなり回って中台の寺に入る頃には本格的な雨になり、雨具

から雨が流れ落ちるほどになった。季節は7月の末だが雨が降れば気温はグンと下がる。

五台山の頂上に立つ寺は、どれもコンクリート建築で城塞を思わせる。雨の中を歩いてやっとたどり着いてもあまり人のぬくもりが感じられなかった。しかし、中台の寺は、五台山めぐりの巡礼たちの人気の宿坊になっているらしかった。到着した時は、^{ひとけ}人気をあまり感じなかったが実際は大勢の宿泊客がいたことを後で知った。

通された部屋は、黄さんの計らいか、外国人の客だからか、一般の宿泊客と別室の部屋で、冷え切った体になんと有難いことか、ストーブを焚いてくれた。毛布も寒いだろうと特別に追加してくれたようだ。トイレが外にあるのを確認していたので、真っ暗い雨の中をトイレに行く難儀を予想したが、部屋の向かいが石炭保存部屋になっていてその奥にトイレがあった。やれやれである。

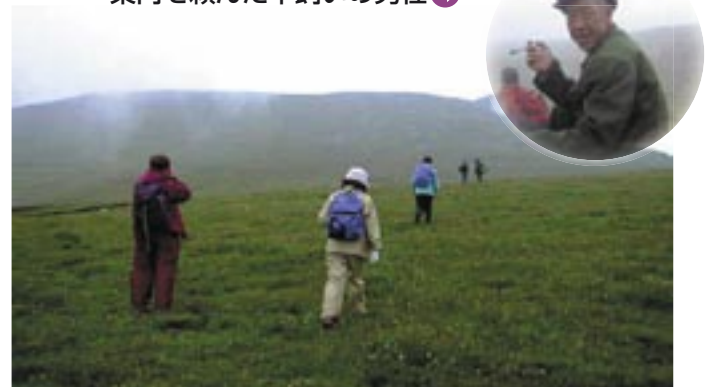
濡れたものを干し、寝床も整えて一息ついたところで食事の知らせが来た。長い廊下を歩き、案内された部屋には既に巡礼客が多数座っていた。

私はこの夜食べたものをすっかり忘れたが、五台山ハイキングの後、参加メンバーの一人である中村文子さんが寄稿下さった文章(2002年9月号)には下記のように書かれている。

『ここでの一番の関心事は、中国のお寺の食事です。案内された食事室にはローソクの明かりが灯された祭壇がしつらえてあり線香の匂いが漂っています。傍らに寺の高僧とおぼしき僧侶が座っておりますので、祭壇とその僧侶に無言で合掌し、いよいよ問題の食事を頂くのですが、その夜の食事は、野菜たっぷり、油たっぷりのうどんでした。翌朝は、おかゆと野菜炒めと漬物です。たぶん普通の農家の食事のようなものと思いますが、会話は禁じられていますので、葬式の最中のようなしめやかな雰囲気です…』

翌朝、雨は上がっていたが真っ白い霧に覆われていた。寺を出たところで、折よく牛飼いの男性に出会い、草原を

案内を頼んだ牛飼いの男性➡



クジラの背中のような草原に行く

進む道なき道のショートカットの案内を頼んだ。

牛飼いの男性と言ったが、広い草原には牛の影はない。牛はどこにいるんだろう。黄さんが聞き出した話では、預かっている牛の角には印があって、放牧地を回って牛がちゃんといるかどうかを確認しているのだそう。男性は時々鞭をピュッと打ち鳴らしながら、霧に覆われた、目印も何もない、ただ広い草原を確かな方向感覚でどんどん進んで行く。斜面は緩やかだが足の速い男性について行くのは結構キツイ。足元にはキク科の小さな白い花が一面に咲いている。乾燥させて枕に入るとよく眠れると、牛飼いの男性が教えてくれた。きっといい香りがするのだろう。

ところで宿の僧坊の前にこの辺りのマップが描かれてあった。ふっと見たら今日のコースの途中で温泉マークの逆さクラゲが描かれてあるではないか。「五台山で温泉に入れる」と色めきたった。残念なこと温泉ではなく、五台山の守護神である文殊菩薩が天下ったところに池があるという印なのだそう。『人騒がせな印をつけなくて欲しいわね』と言い合いながら、ついでだからと立ち寄ってみると廃墟を囲んでいる感じで柵があり、その中に件の池があった。文殊菩薩の手形が付いたという石もあって、自分の手のサイズと比べたりして遊んだ。

天候は霧が晴れるにしたがって回復し、昼前に五台山の最高峰・北台に着いた頃には清々しい青空が広がっていた。北台の寺の、優しいお顔の文殊菩薩様に旅の無事を感謝し、黄さんが早々手配しておいてくれた車の人となり、あっという間に台懐鎮に戻りホテルで昼をとった。粗食を続けた後の昼食の何と美味しかったことだろう。午後は、折からお寺に奉納されていた山西省の地方劇をゆっ

くり楽しんだ。



➡文殊菩薩の手形と自分の手を合わせてみる

➡文殊菩薩が舞い下りたという池



眼下に流れ落ちる滝雲



荘厳な日の出を言葉なく見つめる

▲東台 (2795m)

ネットで五台山を検索していたら、

『東台(望海峰)からは雲海の上の日の出が美しく、西台(掛月峰)の上からは、秋の夜月見をするのが最高で、北台(葉鬪峰)の上からは、雪景色を眺めるのが美しく、南台(錦繡峰)の上からは、草木を鑑賞し、中台(翠石峰)は天体観測に最適の場所である』

とあった。5つの峰々を歩いてみると、まさにその通りと快哉を叫びたくなる。

五台山4日目は、'天気は運'と早朝四時に起きて真っ暗い中をチャーターの車で東台に向かう。道中は雲が多く、日の出の観賞は期待薄のようだったが、2800m近い山頂は垂れこめた雲の上だった。見渡す限りの雲海が広がって、目の前の峰を越える雲が次々と音もなく滑るように眼下の谷底に流れて落ちて行く。滝雲だ。滝雲を上から眺めたのは初めてだった。

雲の縁が色づき始め、真っ赤に染まると、チカリと光るものが見えた。日の出だ。寒さを堪えて日の出を待っていたそれまでの時間がウソのようにスルスルと太陽が雲海の上に昇り始め、みるみる空が明るくなっていった。眼下の滝雲といい、雲海を染めながら昇る太陽といい、荘厳且つ壮大な自然のドラマに目も心も奪われ誰も言葉を発しなかった。

(終)